

【フィリピン残留日本人2世・集団帰国者一覧】

帰国者	①父の氏名 ②家庭裁判所への就 籍許可申立日 ③兄弟姉妹数 ④身元判明状況	父の 出身	性 別	年 齢	出 生 年 月 日	プロフィール
 1 新 ビエンベニトシオ	①新 榮次 ②2011年1月14日申 立、2014年3月3日許 可 ③なし ④判明済み ※鹿児島で親族対面	鹿児島	男	70	1944年 4月28日	父は、1939年頃にダバオデルスル州マララグ町に来て、炭焼きの商売をしてい。父は現地語であるチャバカノ語を話すことができた。両親は、戦争中の1943年5月15日に母の美家で結婚式をあげた。結婚後、父の仕事の関係で両親は一旦パダダ町に移ったが、ビエンベニト出産のためにマララグ町へ戻り、1944年4月にビエンベニトが出生。1ヵ月後にパダダ町へ戻ったが、その後すぐに戦況が悪化し、再度マララグ町へ移った。それから父は日本軍に招集を受け、母とビエンベニトを連れて行きかけたが、母の父に反対されたため断念。母とビエンベニトは山奥へ避難し、父のその後の消息は不明となった。 フィリピン日系人リーガルサポートの調査により、2009年に父の戸籍が判明した。父は、フィリピンへ来る前に日本で結婚していたため、ビエンベニトは2011年に就籍を申し立てており、本年3月に許可された。
 2 ミヤケ イデオ (日本名ヒデオ)	①ミヤケ イサメ ②2014年3月13日 ③3(第3子) ④未判明	広島	男	71	1943年 5月5日	父は、戦前にバンバング州サスムアン町にて漁師をしていた。親のように面倒を見てくれた地元の名士から「フランシスコ」というフィリピン名をつけられ、「イスコ」というニックネームでも知られていた。隣のルバオ町に住んでいた母と結婚し、ルバオ町でイデオの兄2人が出生。父は現地語であるカバンバガン語やタガログ語を話していた。戦争が始まると、父は日本兵となり、家族はマニラへ移った。イデオはそこで1943年に生まれたが、終戦前に父とは連絡が取れなくなり、消息不明となった。 イデオの出生証明書には、父に関して、名はイサメ ミヤケ(Isame Miyake)、既婚、出生地は日本国広島と記録されている。
 3 カジワラ フェリクスベルト (日本名スギオ)	①カジワラ アチロ/ ハチロ ②2014年2月25日 ③4(第3子) ④未判明	福岡	男	78	1935年 12月28日	父は戦前にダバオオリエンタル州に渡り、初めは漁師として働き、その後ルボン町で、村里と森下という日本人とともにアバカ麻栽培に従事した。ルボン町のマカガオという地域で母と知り合い、フェリクスベルトを含む4人の子どもをもうけた。やがて戦争が始まり、戦況が悪化すると、父と村里、森下は帰国することになった。父は、フェリクスベルトの兄と姉を連れ、「機会があれば日本に帰った後に迎えに来る」と母に言い残して出発したが、ダバオ市内でフィリピン兵に銃で撃たれて亡くなった。 フェリクスベルトの出生の記録がルボン町役場に残り、子の名前ソゲ(Zogue・スギオの誤記と思われる)、父の名ハチロ カジワラ(Hachiro Kajiwara)、国籍は日本、出生地は日本国福岡とある。
 4 タケシゲ ビクトリア	①タケシゲ クメオ ②2014年6月17日 ③なし ④未判明	山口	女	70	1943年 10月18日	父と母が会ったのは戦中で、当時父は日本兵としてダバオトリルのキャンプに配属されていた。母は、日系のキャンディ工場に働いていたが、その工場が日本軍のキャンプにされ、キャンプ内で洗濯などの仕事をするうちに、父と知り合った。父は戦前アバカ農園で働いていたが、一度日本へ戻り、日本兵としてフィリピンへ戻ってきたと母に話した。父が母を気に入り、教会で結婚式を挙げようとしたが、神父からの許可が出ず、バゴボ族の方式で1943年1月に結婚式を挙げた。同年10月に、父はオーストラリア方面へ向かう船に乗ったが、その後の消息は不明。父が去った3日後にビクトリアが生まれた。 ビクトリアの洗礼証明書には、父の名クミオ タキシギ(Kumio Takishigui)と記録されている。
 5 ヤギ ホセフィーナ (日本名ミチコ)	①ヤギ セイコ ②申立予定 ③なし ④未判明	不明	女	70	1944年 5月7日	父は、戦前はダバオでアバカ麻の栽培をしていた。父と母が出会ったときは、日本軍がフィリピンを占領していた時期で、父はダバオ市役所で働いていた。二人は部族婚の方式で結婚し、ホセフィーナが1944年に生まれた。ホセフィーナが生まれた頃は、父は日本兵の制服を着て刀をさしていた。普段は日本軍のキャンプにおり、週一度、日用雑貨やミルクを持って自宅に戻ってきていた。米軍の攻撃が始まると、母はホセフィーナを連れて親戚とともに山へ避難した。山でゲリラに遭い、母とホセフィーナは日本人の妻子だったために捕らえられ、ゲリラのキャンプに拘留された。この頃、自宅に戻ってきた父が、2人がいなくなっていることを見つけ、近くに住んでいた母の兄に2人の行方を尋ねたが、この時以来父の消息は不明。母とホセフィーナは母を気に入ったゲリラの一人に命を救われ、母とゲリラは戦後に結婚した。1978年に、ラジオで母や母の兄を探していた日本人がいたと人づてに聞いたが、ホセフィーナがそれを聞いたのは放送の半年後だった。
 6 サトウ ラモン (日本名マサオ)	①サトウ (名不詳) ②2014年6月9日 ③4(第2子) ④未判明	東京	男	78	1935年 11月8日	父は、戦前にコタバトへ渡り、木材の伐採や大工の仕事をしてい。父の仕事仲間には、クボタ、カトリ、ササキといった日本人がいた。父は、現地語であるチャバカノ語や母の部族であるテイドゥイ族の言葉が話すことができた。両親はテイドゥイ族の方式で結婚式を挙げた。その後、ラモンとヘンリーを含む4人の子どもがディナイグ町アワン村(当時)で出生した。父は、戦前に仕事でラナオデルスル州バナゴ、マラバンに行っている間に亡くなり、そのままマラバンで埋葬された。戦争が始まると、サトウの子どもを探しに日本兵が訪ねてきたことが二度あったが、子どもたちを殺されたり連れて行かれたりするのを恐れた母が、子どもたちは病死したと日本兵に話した。小さい頃はそれぞれ「マサオ」「ヒデ」という名前を使用していたが、戦後になり洗礼を受けた際に「ラモン」「ヘンリー」という名前を授かり、それ以降、書類上では洗礼名を使用している。
 7 サトウ ヘンリー (日本名ヒデ)	①サトウ (名不詳) ②2014年6月9日 ③4(第4子) ④未判明	東京	男	75	1938年 6月19日	父は、戦前にコタバトへ渡り、木材の伐採や大工の仕事をしてい。父の仕事仲間には、クボタ、カトリ、ササキといった日本人がいた。父は、現地語であるチャバカノ語や母の部族であるテイドゥイ族の言葉が話すことができた。両親はテイドゥイ族の方式で結婚式を挙げた。その後、ラモンとヘンリーを含む4人の子どもがディナイグ町アワン村(当時)で出生した。父は、戦前に仕事でラナオデルスル州バナゴ、マラバンに行っている間に亡くなり、そのままマラバンで埋葬された。戦争が始まると、サトウの子どもを探しに日本兵が訪ねてきたことが二度あったが、子どもたちを殺されたり連れて行かれたりするのを恐れた母が、子どもたちは病死したと日本兵に話した。小さい頃はそれぞれ「マサオ」「ヒデ」という名前を使用していたが、戦後になり洗礼を受けた際に「ラモン」「ヘンリー」という名前を授かり、それ以降、書類上では洗礼名を使用している。